

第3章 合意形成に関する検討

3-1 合意形成の必要性とイベント開催の意義

(1) 草原保全に向けた合意形成の必要性

近年活発化している草原をめぐる様々な動きのなかで、多様な面から草原の価値が認識されており、それは以下のように4つの項目に大別される。

- 希少動植物の生息から人の関わりの結果維持されてきた点までを含めた、自然の観点からの価値
- 農業生産の基盤、観光資源などとして、経済的な面からみた価値
- 国土保全、水源かん養機能など公共財としての価値
- 「風景」や「文化」という言葉で象徴的に語られる文化的価値

現状の草原問題の背景に、これらの多様な価値を支えてきた農業や地域社会の変容と、それをもたらしているマクロな経済・社会の構造変化があり、国土管理の問題などに通じる幅広い領域の問題を含んでいる。このため、草原の維持に向けて、それぞれの領域から多面的な保全策が論じられるようになっている。

草原保全に向けて中心となる課題は草原を利用した農畜産の産業的自立であり、それを取り囲むような形で、自然、風景、文化、観光、国土保全などの観点から、多様化する草原の価値に対応して、多様な人々が多様な立場から関与していく仕組みづくりが求められており、その内容としては大きく以下の4点が考えられる。

- 市場を通じた草原維持管理費用の負担とそれを成立させるための条件整備
 - 畜産業の収益性向上と、牛による草原維持の継続
 - 土地利用の合理化とそれによる作業負担の軽減
- 公的助成による国民的価値や文化的価値の損失防止
- 受益者の費用負担による資源価値の維持
- 地域間のつながりを踏まえた都市との交流（広範な人々が草原維持を支えるシステムや、草原の多角的利用を含む新たな観光産業の展開などを含む）

新たなしくみづくりに向けてこれらを組み合わせ、積み重ねていくことが必要であり、その場合、草原保全の問題も日本の社会システム全般の変動の中で起こり、従来の枠組を超えた新たなしくみが必要になっている点を踏まえ、まず前提としての社会的関心、理解の獲得が不可欠である。これに関しては以下のような課題が考えられる。

- 草原の価値に関する国民的な合意形成
- 国土管理や環境保全に果たしている地域農業の役割への関心や理解の獲得

もう一方の要件として、新たな社会参加や地域間の交流・連携のあり方、すなわち関与する人々の意識の触発、充実がカギになると考えられる。阿蘇地域の人々にとっては

- 地域の価値の再認識
- 地域自然や文化に対する自信、誇りの回復（畜産業の継続や地域外からのボランティア

ィアを前向きに受け入れる前提となる)

が重要であり、外部からの参加者にとっては、

- 自らを充実させ、より豊かにする行為としてのボランティア参加(農山村地域の人々との交流や農作業体験による感動など。例えば、火という恐怖の対象でもあるものを活用するために人々が共同で対処し、目的を遂げていくという行為には、都市生活では体験できない全身での真剣な対応、人としての原初的な感動がある、という指摘もある)

といった位置づけやテーマをより深めていくことが重要である。

(2) これまでの取り組みとイベント開催の意義

平成8年～10年にかけて環境庁(当時)が実施した「参加型国立公園環境保全活動推進事業」においては、事業の一環として「草原懇話会」をはじめとする草原保全に向けた合意形成促進のためのイベントを開催した。また、事業の展開につれて、草原に関するシンポジウムや野焼き維持作業の体験交流会の開催、阿蘇グリーンストック活動の展開、草原募金創設など、他の主体による阿蘇の草原をめぐる様々な動きがみられるようになり、草原保全に関する社会的な関心も高まってきた。

草原保全のための新たなしくみづくりに向けた合意形成を進めるために、イベント開催は有効な手段の一つであり、以下のような効果があると考えられる。

- 参加する都市の人々にとっては、草原の良さや維持管理の状況、地域のことなどをより深く理解する場となり、草原保全への参加・協力意識を高めていくことができる。
- 地元の人々にとっては、都市の人々との交流により、草原の価値や地域の良さを再認識する場となり、地域や暮らしに対する自信や誇りの回復に繋げていくことができる。

また、イベント開催は取り組むべき課題を顕在化していくうえで効果があり、開催へ至る過程を通じて、内容の精査や、関係する多様な主体間の交流を深め合意形成を進めることが可能である。

本事業では、草原保全のための費用負担のあり方等基本的課題について検討するとともに、草原維持の担い手である牧野組合を盛り立てつつ、それを広範囲の人々の手で支えていくことへの合意形成を図ることを目的としたイベントを計画・開催した。

また、国民的な合意形成に向けて地域外の人々の意見を聞くとともに、草原保全に直接関わる地域内の農・畜産業関係者、その他地域内の様々な分野の人々や居住者の意見交換を重ねることにより、将来的には、草原保全をテーマに、行政のみならず、様々な主体や組織がそれぞれの活動を推進していく中で、必要に応じて情報交換や協議を行い、相互に協力しあえるような連携関係を構築していくことを目指した。

【参考：阿蘇の草原をめぐる動き】

参加型国立公園環境保全活動推進事業の経緯

平成 8 年 10 月 第 1 回草原懇話会開催
阿蘇くじゅう国立公園内の優れた景観を維持していくための長期的方向について幅広い観点から検討を進めるため、「草原懇話会」を設置、第 1 回懇話会は「国立青年の家」にて公開形式で開催、約 300 人の参加があった。

平成 9 年 3 月 第 2 回草原懇話会 開催
阿蘇町赤水原野において地元の原野管理組合の協力のもと、270 人が参加して野焼きを体験し、草原維持作業への認識を深めた。続いて交流会を行った。

平成 9 年 6 月 第 3 回草原懇話会 開催
熊本市内の「熊本テルサ」において、草原の様々な価値や維持管理の方向について議論した。県・町村関係者など 130 人が参加した。

平成 10 年 3 月 タデ原野焼きの実施
阿蘇に隣接する飯田高原タデ原で、地元観光協会等の団体が牧野組合の協力のもとに実施する野焼きに協力し、ボランティア主導型の野焼き体制について検証を行った。作業へは約 60 人が参加した。

平成 10 年 7 月 パンフレット「阿蘇の草原はいま・・・参加型国立公園環境保全活動推進事業中間報告」を作成、配布

平成 11 年 3 月 参加型国立公園環境保全活動推進事業報告書とりまとめ

草原をめぐる動き

シンポジウム

阿蘇千年の草原シンポジウム (H9.10 熊本市)
くまもと楽座評定会・熊本日日新聞社主催
阿蘇町開湯 100 年記念シンポジウム (H10.3 阿蘇町)
阿蘇町・熊本日日新聞社・阿蘇町開湯ルネサンス実行委員会主催
阿蘇の草原を守る人々の声を聞く会 (H10.8 一の宮町) 阿蘇の自然を愛護する会主催
草原と農業の新たな展開 そして都市との共生 (H10.9 産山村) 九州農政局・同交流会実行委員会主催

野焼き・輪地切り体験交流会

産山村上田尻原野で「輪地切り」体験・交流会開催 (平成 9 年より)
一の宮町古閑原野の野焼きに地元阿蘇高校国際観光科の生徒が参加 (平成 10 年)
阿蘇グリーンストックでは野焼き支援のため体験・研修希望者を募集、平成 11 年 2 月に作業研修会を実施。3 月の野焼きシーズンには 5 町村 12 牧野組合へボランティアを派遣

阿蘇グリーンストック財団の活動

あか牛産直事業をスタート
平成 9 年 阿蘇の草原・森林を守るトラスト基金募金
平成 10 年 阿蘇の自然や農的営み、歴史・文化を地元住民・年住民と一緒に学ぶ阿蘇大学 (グリーンストック市民講座) を開講
野焼き・輪地切りボランティアの組織化、牧野組合の野焼き輪地切りの実態調査 (熊日草原基金の助成による)

熊本日日新聞社 55 周年キャンペーン「阿蘇千年の草原」
平成 9 年からのキャンペーンに続き、平成 10 年には「守ろう千年の草原 阿蘇の草原基金」を展開、集まった募金 2,950 万円は以下の各事業に活用。

野焼き・輪地切りのボランティア育成
草原保全の基礎資料とする草原・牧野組合実態調査
草原のすばらしさや危機の実態を訴えるビデオ製作
シンポジウムやイベントの支援、輪地切り機械化試験
野焼きに使用する「ジェットシューター」100 台購入

阿蘇グリーンストック財団：貴重な阿蘇の生命資産（水と緑＝草原・森林・農地等）を護り後世に受け継いでいくため、農村と都市の連携による様々な活動を行うことを目的として、平成 7 年に設立された団体。